

言語地図に依る現代韓国語 /ㅍ/ 音小考

—小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料を中心に—

岩 井 亮 雄

1 はじめに

筆者は拙稿（2017）で小倉進平（1944）所載資料を活用して現代韓国語 /ㅍ/ 音の地域差を論じた。本稿はその続編であり¹、小倉進平（1944）所載資料を通して、また韓国精神文化研究院（1987-1995）等の所載資料を適宜参照し²、現代韓国語 /ㅍ/ 音の地域差を考察する³。

現代韓国語の /ㅍ/ 音に焦点を当てるのは、その発音が必ずしも判然とはしないからである。一つは各方言資料の調査当時の発音がどうかという共時的課題である⁴。また一つはこの母音が後期中世語以来どのような音変化を経て現在に至るかという通時的課題である⁵。

小倉進平（1944）所載資料を参照するのは、この資料が必ずしも後学によって十分に活用されてこなかったのみでない。この資料の限界等は既に指摘されてはいるが⁶、それでも全道的な調査資料として当時の韓国語諸方言または韓国語史等を考える上で有意義であると考え。

拙稿（2017）とは異なり韓国精神文化研究院（1987-1995）等の方言資料を参照したのは、小倉進平（1944）での /ㅍ/ 音の転写等に幾つかの限界があるからである（2.1.1参照）。また各資料の調査時期の違いから発音の変化や維持に示唆が得られるからである。

本稿は方言資料を言語地図に示して /ㅍ/ 音の地域差を考察するが、こうした先行研究に최성균（2013）がある。최성균（2013）は韓国地域を韓国精神文化研究院（1987-1995）に、北

¹ 本稿では主に20世紀の韓国語方言資料を分析対象とする。

² 韓国精神文化研究院（1987-1995）の編輯人は巻によって異なり、語文研究室または人文研究室である。本稿でこの資料を参照するときは、韓国精神文化研究院（1987-1995）のように記す。

³ 各方言資料に基づき幾つかの調査項目に言語地図とその解釈を附した論考がある。小倉進平（1944）については福井玲編（2017, 2018）を、韓国精神文化研究院（1987-1995）については李翊燮他（2008）を参照。

⁴ 金鳳國（2006）は19世紀末から20世紀の韓国内外研究者の観察記録と1930年代音声資料に基づき、主に中部方言の /ㅍ/ の音価を論じ、二重母音 wi の場合が多く、先行子音等が関わる一部環境で単母音 y が現れることを示す。先行子音による /ㅍ/ の発音の違いについては、J. Scott（1891: xviii）、李熙昇（1955: 89-90）、M. S. Han（1963: 101-102）、李炫馥（1971a: 47-48）、郭忠求（1982: 30-33）等を参照。先行子音だけでなく後続子音の有無についても言及する論考としては宋喆儀・兪弼在（2000: 10-11）を参照。/ㅍ/ の発音と強勢との関係については李炫馥（1971b: 23）を参照。発音に関して一つだけ補足すると、/ㅍ/ の発音を [qi] のように観察する論考もあるが（許雄1985: 487、郭忠求2003: 62、鄭仁浩2004: 133等）、本稿では音声詳細を論ずることは避け、以下では主に二重母音 wi か単母音 y かに焦点を当てて論ずる。

⁵ /ㅍ/ は後期中世韓国語以来 uj 乃至 ui と発音されたとされ、この発音から (i) wi を経て y へ変化する（G. J. Ramstedt 1939: 443、李崇寧1956: 19、李崇寧1968: 18、許雄1985: 486-487、郭忠求2003等）、(ii) y を経て wi へ変化する（崔明玉1982: 80-85）、(iii) y を経ないで wi へ変化する場合と y を経て wi へ変化する場合がある（韓榮均1991、金鳳國2006、최성균2013等）等の言語内的観察に基づく議論がある。この他、話者の移動や世代差という言語外的要因に着目した音変化の議論もある（이옥희2014a, 이옥희2014b）。なお、言語地図を通してことばの変化を考察する論考としては大西拓一郎編（2017）等を参照。

⁶ 小倉進平（1944）の方言資料としての長所短所等については、李崇寧（1976: 209-217）、李秉根（2005）、鄭承喆（2010a: 26-27, 2010b: 177-179）福井玲（2016: 42）、福井玲編（2017: iii, 2018: iii）等を参照。

朝鮮地域を小倉進平（1944）等に基づいて「꺾」「박꺾」「까마꺾」「마꺾」を取り上げて論ずる。そして分布の特徴より朝鮮半島の東南端と西北端から /ㅈ/ 音の発音の変化が始まったとみて、uj > wi と uj > y > wi の2つの変化が可能だったと推量する⁷。

2 現代韓国語 /ㅈ/ 音の地域的特徴とその周辺

2.1 方法と注意

方法は拙稿（2017）に倣う。即ち小倉進平（1944）所載資料を通して当時の /ㅈ/ 音の地理的分布の特徴を考察する。しかし /ㅈ/ 音を扱った拙稿（2017）とは必ずしも並行して議論できない部分があり、予めその部分について論じておく。

2.1.1 小倉進平（1944）所載資料の限界

まず小倉進平（1944）資料篇では /ㅈ/ を典型的に ui と転写する。しかし小倉進平（1944下: 13-14）に従うと ui は wi と転写されるのが妥当と考えられる⁸。本稿では小倉進平（1944）資料篇の ui は wi とみて、このように置換する。

次に小倉進平（1944）資料篇には /ㅈ/ を単母音 ø で転写する例はあるが、/ㅈ/ を単母音で転写する例は見られない。これは /ㅈ/ を単母音 y で発音していないことを示す可能性もあれば、小倉進平（1944）が wi か他の母音に y の発音を含んで記述した可能性もある⁹。この問題を探る一つの術として、本稿では小倉進平（1944）よりも後世に調査された韓国精神文化研究院（1987-1995）、金英培（1977）、崔鶴根（1990）を適宜参照する。

2.1.1.1 方言資料についての補足

本稿で分析対象とする小倉進平（1944）、韓国精神文化研究院（1987-1995）、金英培（1977）、崔鶴根（1990）所載資料の調査地域、調査年代、被調査者等を整理し、考察の前提としたい。

小倉進平（1944）は、調査項目により調査地点に偏りが見られるが、朝鮮半島全域を調査地域とする。主に1911年から約20年間、原則として当時の普通学校学生を対象に調査する（小倉進平1944下: 8-13）。

韓国精神文化研究院（1987-1995）は現在の韓国地域の諸方言を調査する。一次調査は主に1980年代前半に、確認調査は主に1980年代後半から1990年代前半に実施された。調査当時50代後半から80代の話者を対象に調査する。

金英培（1977）は平安方言を調査する。言語形成期を出身地方で過ごした、調査当時50代から70代の話者を主な対象として調査する。1967年に被調査者に直接会って調査した場合と印刷物を見て被調査者が記入した場合とがあるという。韓国精神文化研究院（1987-1995）が韓国

⁷ 音変化に関しては、脚注5及び2.3.2も参照。

⁸ ui が1音節であることは、u-i のようにハイフンを介さないことに従うと考えられる（福井玲2016: 49-50）。

⁹ 先行研究のうち、福井玲編（2017, 2018）で ui を含む語形が現れる論考の多くや郭忠求（2003: 64）、鄭仁浩（2004: 128）は ui を wi と見做して論じ、최정규（2013: 182-183）ではこの発音が wi か y かは判断を保留する。小倉進平（1931）ではこの母音について次のように解説している：もと u・i 両音の合した二重母音であるけれども、事実上の発音は w と i 母音との結合である場合が少くない。茲では wi と記す。（小倉進平1931: 147）

地域の資料しか扱っていないので、北朝鮮地域のデータを補うために金英培（1977）を参照した。この他にも北朝鮮地域の方言資料や方言辞典は存在するが、本稿で興味のある母音の音色を調べるためにはハングル表記でない発音表記の資料が必要であり、また被調査者等に関する情報や適当な調査項目が立項されている必要もある。斯くの条件を備えた北朝鮮地域の資料としては金英培（1977）しか参照できなかった。

小倉進平（1944）以外で朝鮮半島全域を調査地点とする方言資料に崔鶴根（1990）がある。この方言資料は1955年8月から1976年度に渡り調査を行ない、北朝鮮地域の方言は断片的ではあるが随時蒐集した結果である（崔鶴根1990: 14）。

2.1.2 方言資料の転写について

本稿では小倉進平（1944）所載資料の語形を、2.1.1のとおり ui は wi に置換するほか、 \ddot{u} は i に、 \ddot{o} は Δ に、 \acute{h} は h に置換する。その他は小倉進平（1944）の表記に従う。

韓国精神文化研究院（1987-1995）等の方言資料の語形を記す際は、本稿はあくまでも当該資料を小倉進平（1944）と比べることに主眼を置くため、小倉進平（1944）の転写に対応するように直して記す。特に韓国精神文化研究院（1987-1995）の記述は小倉進平（1944）に比べて精密な場合もあるが、そういう場合であってもある程度は簡略な表記に直して小倉進平（1944）の転写に対応するように記す。

2.1.3 言語地図の作成について

分析の簡便のために主要な項目の言語地図を作成して附す。言語地図作成のために言語地図作成システム Seal8.0（福嶋秩子・福嶋祐介・福井玲作成）を用いる。

ところで言語地図はあくまでも主観図である（大西拓一郎編2016: i）。本稿では /ㄷ/ 音の地理的分布の特徴を把握することを目的として言語地図を作成する。

また本稿ではあくまでも韓国精神文化研究院（1987-1995）等の方言資料は小倉進平（1944）所載資料の比較対象として活用することに重点を置く。故に韓国精神文化研究院（1987-1995）等の方言資料を言語地図化する際、地図の概形は行政区分等を含めて小倉進平（1944）言語地図化の場合と同じにする。同じ調査地点は同地点を使用し、異なる地点は適宜プロットし直す。

2.2 分析の対象

小倉進平（1944）所載資料で朝鮮半島の全道またはそれより1道少ない地域に渡って調査された200余項目のうち¹⁰、wi か u-i を含む語形が見られる項目は以下の50余項目である¹¹。

- | | |
|---|--|
| 1. 野原 tu-ru-i : 咸北 (1) | 忠南 (1) 忠北 (3) 京畿 (4) 江原 (3) |
| 2. 角【方位】 mo- ^h wi : 咸南 (1), mo- ^h wiŋ-i : 黄海 (2) 咸南 (1) | 黄海 (14) 咸南 (9) 咸北 (7) 平南 (1), nwi : 忠南 (1) 忠北 (2) 平北 (6) |
| 3. 外 wi : 慶南 (1) 慶北 (2) | 5. 頬 ^h kwi-met-tɛ-gi : 咸南 (9), kwi-mit- |
| 4. 姉妹 nu-i : 济州 (4) 全南 (2) 全北 (1) | ^h ɛ-gi : 咸南 (5) |

¹⁰ 小倉進平（1944）所載資料のうち言語地図に描くのにふさわしい200余項目については、福井玲（2016）を参照。

¹¹ 通し番号、語彙項目、当該語形、その語形が見られる地域、その地点数の順に示す。

6. 唇 ip-pa-wi : 濟州 (4)
7. 背 twit tʃan-diŋ : 京畿 (1) 黃海 (3) 平南 (1) 平北 (5)
8. 瘧 sa-ma-gwi : 忠南 (2) 京畿 (4) 黃海 (12) 咸南 (15) 咸北 (8), sam-ba-kʰwi : 咸北 (1)
9. 煙出し kwilʔtuk : 全北 (2), kwiʔtuk : 全南 (11) 全北 (3)
10. 釘 mo-da-gwi : 黃海 (10) 咸南 (3)
11. 耳輪 kwiʔko-ri : 慶南 (1) 慶北 (3) 忠南 (2) 京畿 (2) 黃海 (3) 平南 (1) 平北 (2), kwiʔkol-li : 濟州 (1) 全南 (3) 全北 (3), kwi-go-ri : 全南 (6) 慶北 (1) 忠南 (3) 京畿 (2) 江原 (5) 黃海 (10), kwi-sa-sil : 平北 (1), kwi-jɔŋ-dʒi : 平北 (3), kwɪŋ-dʒi : 平北 (2)
12. 木履 kɔk-twi-gi : 京畿 (1) 咸南 (3)
13. 髷 tɔl-wi : 濟州 (4)
14. 周衣 tʃʰu-i : 江原 (2)
15. 木靴 su-i : 慶南 (1), swi-jɔ-dʒi : 全北 (1), swi-jɔ-dʒa : 全北 (1) 咸南 (1), swi-dʒi : 慶北 (1)
16. 肉魚 kwi-gi : 慶北 (1)
17. 饅頭 man-dwi : 咸南 (1), man-tʰwi : 咸南 (4) 咸北 (3)
18. 炒麵 mi-swi : 咸南 (6) 咸北 (2), mil-swi : 咸南 (2)
19. 燒酎 a-raŋ-dʒwi : 咸南 (1)
20. 蓑 nwi-jɔk : 江原 (1) 黃海 (6) 咸南 (4)
21. 鋤 tʃʰwi-tʰo : 平北 (1)
22. 棗の実 tɛ-tʃʰwi : 咸南 (9)
23. 山葡萄 mɔ-rwi : 濟州 (1), mɔl-gwi : 黃海 (1) 咸南 (4) 咸北 (5)
24. 杏子の実 sal-gwi : 濟州 (2) 黃海 (5) 咸南 (14) 咸北 (12)
25. 唐辛 taŋ-tʃʰwi : 咸南 (1)
26. 大根 mu-i : 江原 (1) 黃海 (5) 平南 (1)
27. 黃瓜 u-i : 忠南 (2), wi : 慶南 (2) 慶北 (8) 江原 (1)
28. 蜀黍 swi-su : 京畿 (1) 黃海 (10), swi-swi : 全南 (1), swi-si : 全南 (4), swi : 咸南 (14) 咸北 (7) 平北 (7), pap-swi : 咸北 (2)
29. 玉蜀黍 taŋ-swi : 咸南 (2) 咸北 (6), ok-swi : 咸北 (2)
30. 粟 tʃwi-bi : 慶北 (1)
31. 岩 pa-wi : 忠南 (4) 京畿 (4) 江原 (1) 黃海 (2), paŋ-kʰwi : 黃海 (6)
32. 鉄・金 ʔswi : 慶南 (1)
33. 鉄 ka-wi : 全南 (1) 忠南 (1) 忠北 (2) 京畿 (3) 黃海 (9)
34. 馬槽 kwi-suŋ : 江原 (2), kwi : 黃海 (3), kwi-jɔŋ : 黃海 (3), kwi-juŋ : 京畿 (1) 江原 (9) 黃海 (1), kwi-i : 慶北 (5), kwi-iŋ : 京畿 (1), kwɪŋ : 黃海 (1)
35. 糊刷毛 kwi-bal : 咸南 (6) 咸北 (9), pʰul ʔkwi-bal : 咸南 (1), kwi-al : 全南 (2) 全北 (3) 慶南 (1) 平南 (1) 平北 (1), kwi-jɔl : 京畿 (2) 黃海 (11) 咸南 (3), pʰul kwi-al : 忠南 (1)
36. 鞆 tʃʰwi-tʃʰɔn : 一般, swi-tʃʰɔn : 咸南 (3)
37. 斧 swi-tʃʰɔŋ-i : 咸北 (1), swi-tʃʰe : 咸北 (1)
38. 綿繰車 ʔswi-ja : 黃海 (1)
39. 箸 hɔŋ-dʒe mu-tʃʰwi : 咸南 (2)
40. 鵝鳥 kɔ-wi : 京畿 (1)
41. 啄木鳥 tak-ta-gwi : 黃海 (1), ʔtʃik-pa-gwi : 黃海 (1)
42. 嘴 tʃu-dwiŋ-i : 京畿 (4) 黃海 (1)
43. 猫 kwi : 慶北 (1), kwi-ɛŋ-i : 全南 (2) 全北 (4), kwi-ɛŋ-i : 全南 (1)
44. 獐 tʃaŋ-gwi-mi : 咸南 (1)
45. 牛 swi : 慶北 (1)
46. 狐 jɔ-wi : 京畿 (1) 黃海 (7)
47. 蝙蝠 pak-tʃwi : 忠南 (5) 忠北 (5) 京畿 (2) 黃海 (5), ʔpak-tʃwi : 全北 (4), ʔpal-tʃwi : 慶南 (1) 慶北 (5) 江原 (2) 黃海 (3) 咸南 (8) 咸北 (5), pok-tʃwi : 全南 (2) 黃海 (7), ʔpok-tʃwi : 全南 (6) 全北 (2), ʔpol-tʃwi : 慶南 (4) 慶北 (2) 咸北 (1), tɔ-ram-tʃwi : 濟州 (4)

48. 鰐 sa-wi : 済州 (1), sɛ-wi : 済州 (2)
 49. 蚕 nu-i : 黄海 (4), nwi : 全南 (2) 全
 北 (1) 慶北 (2) 忠北 (2), nwi-e : 全
 南 (4) 全北 (3), nwi-jo : 全北 (4),
 nwi-bi : 慶南 (1)
 50. 木 mu-t^hwi : 咸南 (1)
 51. 瘦せる jo-wi-da : 京畿 (4) 江原 (2) 黄
 海 (14)
 52. 誦んずる win-da : 忠北 (1), wi-an-da :
 慶南 (1)
 53. 回答 hwi-dap : 慶南 (1) 慶北 (2)

これらに加え、小倉進平 (1944) 所載資料では調査地点に「多くの地方」等を含む項目も全道的に調査されたと解釈することができると見做し、「鼠」も分析対象に加える。以下、/ㄱ/ 音と関連のある語形が全道的に調査された語彙項目を中心に考察する。

2.3 結果と考察

2.3.1 典型例

2.3.1.1 小倉進平 (1944) の場合

「耳輪」「糊刷毛」「鼠」「蝙蝠」は後期中世語から現代語にかけて綴字がㄱのままであると考えられる項目である。前者2項目は /ㄱ/ の先行子音が /ㄱ (k)/ で、後者2項目は /ㄱ/ の先行子音が /ㅍ (tʃ)/ である。「耳輪」の「耳 (귀)」と「鼠 (쥐)」の後期中世語は去声である。

(1) 耳輪 (小倉進平1944上: 136-137)

kwi (または kwiŋ) が未調査地点の忠北と別系統の語形を用いる咸南・咸北を除く全域に第一音節で現れる¹²。ki が慶南・慶北に、kweŋ が黄海に第一音節で現れる。

(2) 糊刷毛 (小倉進平1944上: 227-228)

まず kwi-al 系統は、kwi が済州・慶北・忠南・忠北を除く全域に第一音節で現れる。ki が慶南に、kwe が京畿に、kwɛ (または kwɛ:) が全北・黄海に、kø が全北に第一音節で現れる。

次に p^hul ʔkwi-al 系統は、ʔkwi (または kwi) が忠南と咸南に第二音節で現れる¹³。ʔki (または ki) が慶南・慶北・忠北・咸南・咸北に、ʔku が慶北に、ʔke と ʔko が咸北に第二音節で現れる。これらは第二音節に現れるため、先述の kwi-al 系統とは異なり ʔkwi (または kwi) より ʔki (または ki) の方が広範囲に見られると考えられる。ʔku, ʔke, ʔko は散発的なものである。

その他、b が慶南・慶北・咸南・咸北に kwi-al 等の語中で現れる点が単語史や音韻史を考える上で注目される。kwi-al 系統や p^hul ʔkwi-al 系統以外の語形も全道的に見られる。

(3) 鼠 (小倉進平1944上: 301)

tʃwi は多くの地方に見られるという。tʃi (または ʔtʃi) が慶南・慶北に見られる。tʃwiŋ-i / tʃweŋ-i は済州の語形である。no-siŋ / soŋ-k^hu は山人参採集業者の隠語という。

¹² 「頬」(小倉進平1944上: 88-89) では第一音節が耳に由来すると思われる kwi-mit-t^hɛ-gi, ʔkwi-met-tɛ-gi (sic) という語形が咸南に見られるので、kwi (または ʔkwi) が咸南にも現れると見做すことができるだろう。

¹³ 小倉進平 (1944上: 227-228) の語形のうち p^hul kwi-al 等では第二音節頭に記号 ʔ が抜けているようである。ここでは小倉進平 (1944上: 227-228) の表記のままだに記す。

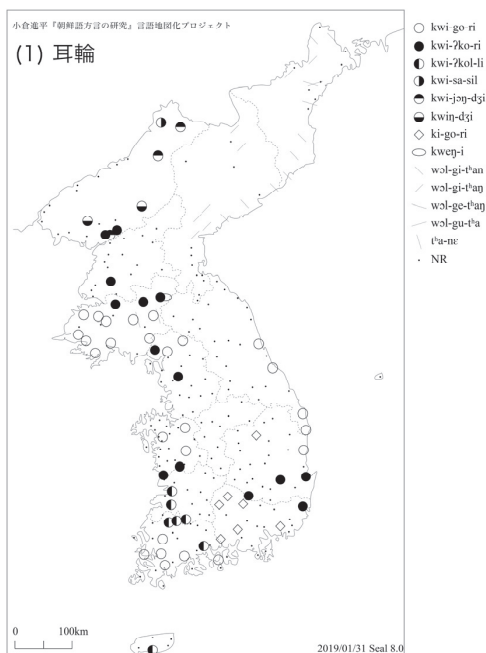


図1. 耳輪

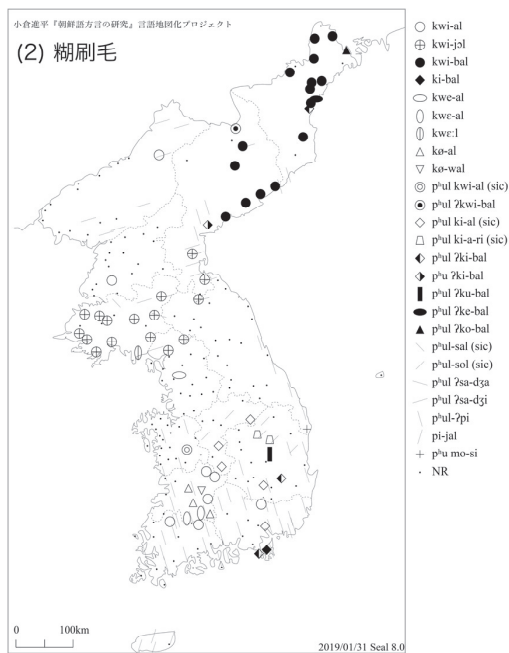


図2. 糊刷毛

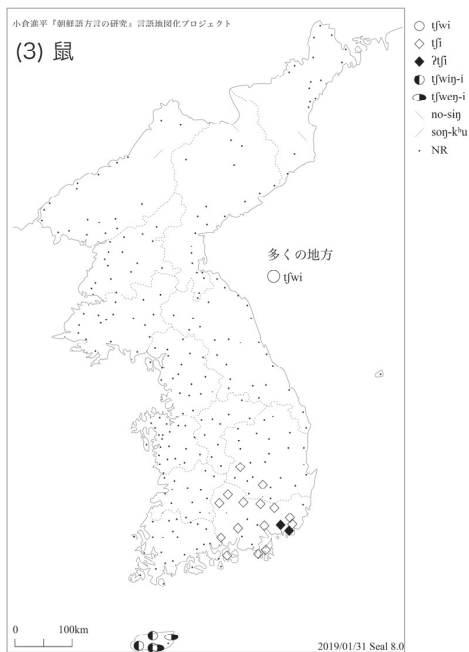


図3. 鼠

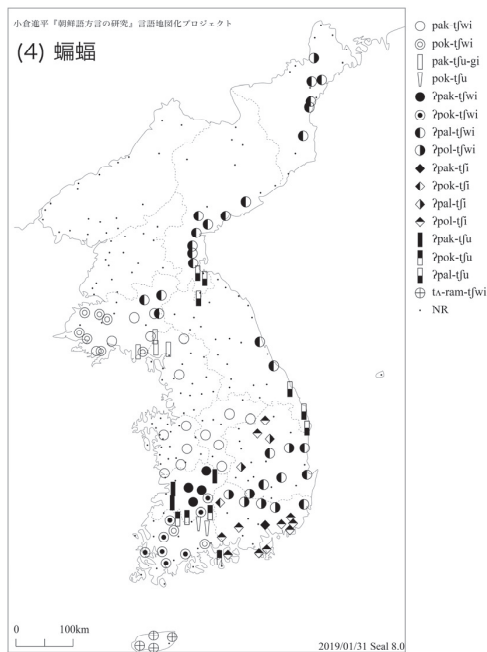


図4. 蝙蝠

(4) 蝙蝠 (小倉進平1944上: 302)

第二音節に注目すると, tʃwi が未調査地点の平南・平北を除く全道に, tʃi が慶南・慶北に, tʃu が全南・全北・江原・咸南に現れる¹⁴。pak-tʃu-gi は京畿・黄海の語形で, tʌ-ram-tʃwi は済州の語形である。

(1)～(4)からは wi が全道的に分布し, その変種として i が慶南・慶北に分布する傾向があることが分かる。その他の変種として we / u / ø / e / o のような発音が散発的に見られる。単母音 y が記録されていないことも分かる。

2.3.1.2 韓国精神文化研究院 (1987-1995) と金英培 (1977) の場合

2.3.1.1の項目が小倉進平 (1944) 以降に調査された方言資料ではどのように現れるかを考察する¹⁵。以下, 韓国地域のデータは韓国精神文化研究院 (1987-1995) に基づいて, 平安道のデータは金英培 (1977) に基づいて見てみる。

(5) 귀 (韓国精神文化研究院1987-1995: I. 221及び金英培1977: 112)

「耳輪」を表す語が両資料にないので, 「耳」を表す語を分析する。ky (または ky:) が済州と慶北を除く韓国地域に, kwi (または kwi:) が全北を除く韓国地域に見られる。kuj が忠南・忠北に, ki (または ki:) が慶南・慶北・忠北に見られる。全南・全北には第一音節が ky の ky-ʔtɛ-gi という語形も見られる。済州で kwi が, 慶南・慶北で ki/kwi が, その他の地域で ky が分布する傾向がある。平南・平北には kwi や kwi-ʔtɛ-gi/ku-ʔtɛ-gi という語形が見られる。

(6) 귀알 (韓国精神文化研究院1987-1995: I. 133)

金英培 (1977) に当該項目はないので, 韓国精神文化研究院 (1987-1995) のみ扱う。

まず ky-al 系統の語形では, ky が全北・慶北・忠北・京畿に, kwi が忠南・江原に第一音節で現れる。kwe / kwe: / kɔ: が京畿に第一音節で現れる。

次に p^hul-ʔky-al 系統の語形では, ʔky (または gy) が忠南・忠北・江原に第二音節で現れる。ʔki (または gi) が慶南・忠南・忠北に, ʔku が忠南に, ʔke が京畿に, ʔkjo (または gjɔ) が忠北・京畿に, ʔkɔ が忠北に第二音節で現れる。

その他, b が慶北に ky-bal のように語中で現れる。ky-al 系統や p^hul ʔky-al 系統以外の語形が広範囲に見られる。

(7) 쥐 (韓国精神文化研究院1987-1995: I. 478)

金英培 (1977) に当該項目はないので, 韓国精神文化研究院 (1987-1995) のみ扱う。

tʃy (または tʃy:) が済州以外の韓国地域に, tʃwi は済州・全南・全北以外の韓国地域に見られる。tʃi が慶南・慶北・忠南に, tʃɛ が慶北に見られる。tʃwen-i/tʃwein-i/tʃun-i は済州の語形である。済州で tʃwen-i 等が, 慶南・慶北で tʃi が, その他の地域で tʃy が分布する傾向

¹⁴ 小倉進平 (1944上: 302) の語形では tʃwi 等の前に記号 ʔ が抜けているようである。ここでは小倉進平 (1944上: 302) の表記のままに記す。

¹⁵ 語形の転写については, 2.1.2を参照。

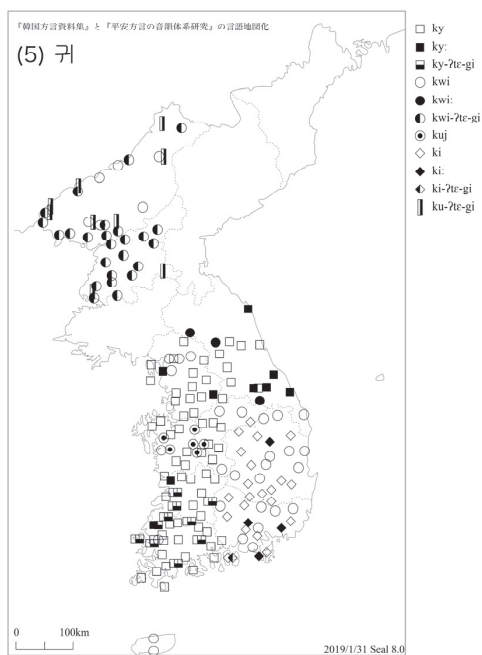


図5. 귀

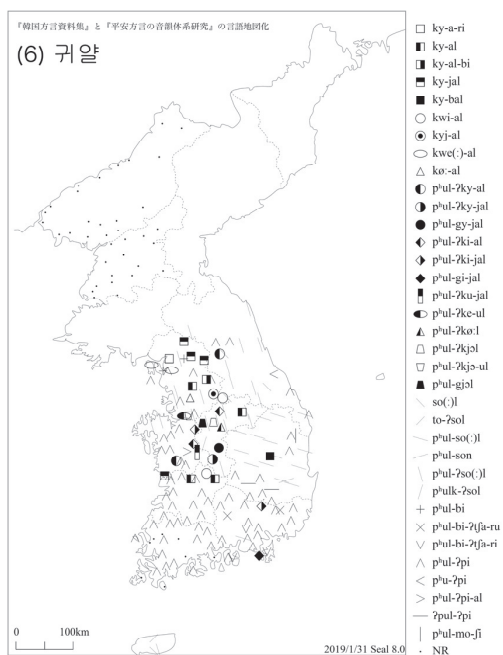


図6. 귀알

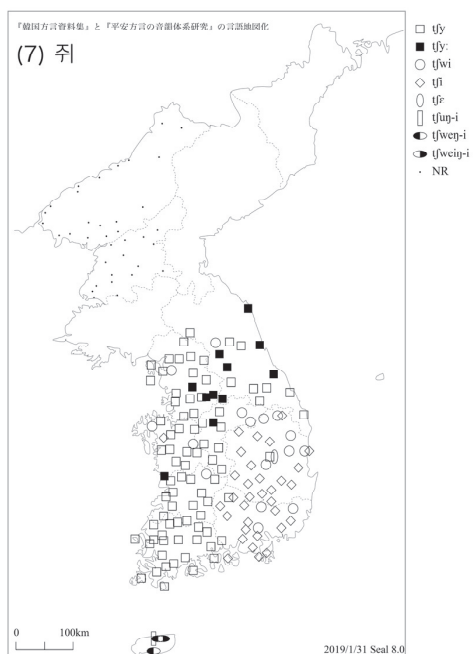


図7. 쥐

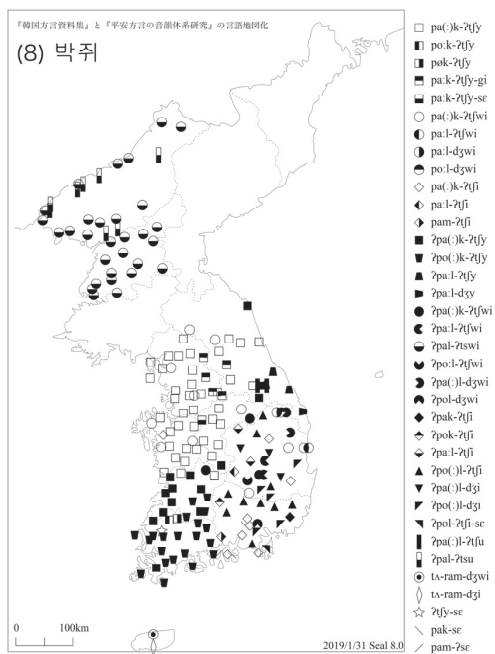


図8. 박쥐

がある。

(8) 박쥐 (韓国精神文化研究院1987-1995: I. 479及び金英培1977: 142)

ʔfɥ (または dʒɥ) が済州・慶南を除く韓国地域に, ʔfwi (または dʒwi) が全南・全北を除く韓国地域に第二音節で現れる。ʔfi (または dʒi) が慶南・慶北に, ʔfu が江原に現れる。tʌ-ram-dʒwi / tʌ-ram-dʒi は済州の語形, ʔfɥ-se は全南の語形である。済州・慶南・慶北で ʔfi / ʔfwi が, その他の地域で ʔfɥ が第二音節で現れる傾向がある。平南・平北には ʔtswi 乃至 ʔfu が第二音節で見られる。

(5) ~ (7) と異なり /ㅍ/ が長母音で現れないのは, /ㅍ/ が第二音節に現れる所以である。

(5) ~ (8) からは次のようなことが分かる。y が済州を除く韓国全域に, wi が全南を除く韓国全域と平安方言に見られる。これらの変種として i が慶南・慶北に主に分布する。傾向としては, 全南・全北・忠南・忠北・京畿・江原で y が, 済州で we / wi が, 慶南・慶北で i / wi が, 平南・平北で wi / u が主に分布する。uj / u / ø / e / jɔ 等が散発的に見られ, 長母音を含む語形が見られる地域もある。

2.3.1.3 韓国精神文化研究院 (1987-1995) の補足

小倉進平 (1944) 所載資料中の典型例は2.3.1.1の4項目に過ぎない。ここで韓国精神文化研究院 (1987-1995) 所載資料のうち, 後期中世語から現代語まで綴字がㅍのままであると考えられる一音節語3項目, ㅍ【粳米】, ㅍ【後】, ㅍ【蠅の卵】を補足する。いずれの項目も語形や発音の地理的分布の特徴は概ね (5) ~ (8) と同様である¹⁶。その他の観点から各項目の特徴的な部分を以下に記す。なお後期中世語でㅍは上声, ㅍは去声である。

(9) ㅍ (韓国精神文化研究院1987-1995: I. 002)

慶南・慶北では頭子音が両唇鼻音の mi が, 忠南では nuj が見られる¹⁷。

(10) ㅍ (韓国精神文化研究院1987-1995: I. 577及び金英培1977: 133)

後期中世語で上声であったことが, 済州・忠南を除く韓国地域で長母音の語形が見られる所以と考えられる。これと関連して tuj や tui が現れない点が注目される¹⁸。全南の語形 tyt (または ty:t) の音節末子音は後期中世語 ㅍ (ㅍ) のㅍの名残であろう。

なお金英培 (1977: 133) にはㅍㅍ【後ろ手】という調査項目が見られる。平南・平北ではㅍの部分 は twi として現れるようである。

¹⁶ ㅍ【上】(韓国精神文化研究院1987-1995: I. 574) は後期中世韓国語ではㅍ (ㅍ) であった。南西地域 (全南・全北) で uk 等の語形が, 東南地域 (慶南・慶北とその周辺) で u/u: 等の語形が, 忠南・京畿とその周辺で uj 等の語形が見られる。

¹⁷ 慶南・慶北で頭子音が m になる理由は不明であるが, 地域的なものと思われる。両唇音の後ではㅍ > ㅍのような変化が起こり易い (兪弼在2006)。mi はこうしたこととも関連があると思われる。

¹⁸ 後期中世韓国語で /ㅍ/ 部分が上声の「山・墓」(小倉進平1944上: 35-36)「黄瓜」(小倉進平1944上: 203-204) で母音連続 o:i が見られることは対照的である。

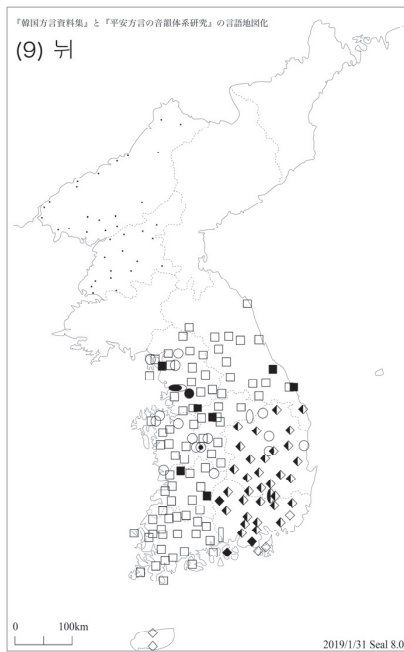


図9. ㄴ

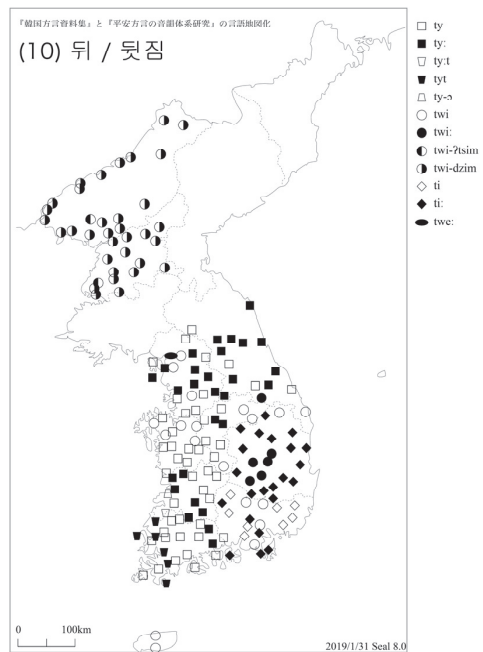


図10. 뒤

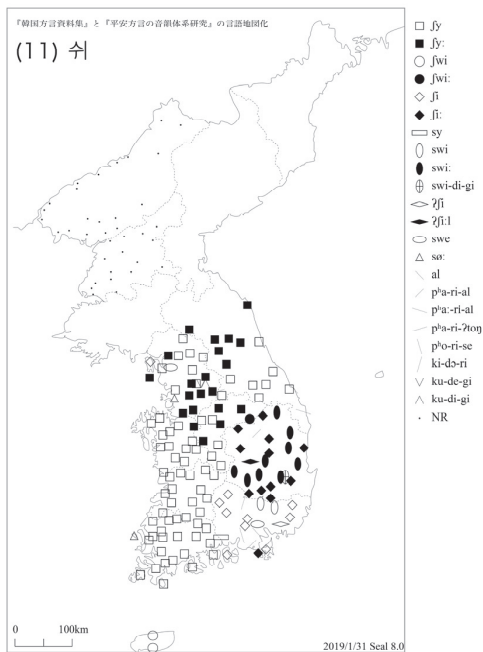


図11. 쉬

(11) ㅅ (韓国精神文化研究院1987-1995: I. 428)

慶南・慶北・忠北・京畿・江原に長母音の語形が見られる。この単語は後期中世語で去声であったので、長母音は声調によるものではなく、先行子音の摩擦音等によるものであろう。

s と ㅅ を記述し分ける場合が確認でき、s が慶南・慶北に主に見られることが分かる。

2.3.2 典型例の考察

2.3.1では小倉進平(1944) 所載資料の「耳輪」「糊刷毛」「鼠」「蝙蝠」と韓国精神文化研究院(1987-1995) 及び金英培(1977) 所載資料の「귀」「귀알」「쥐」「박쥐」及び「늪」「뒤」「쉬」を対象に /ㄱ/ 音の地理的分布の特徴を概観した。その内容を要約すると次のようである。

小倉進平(1944) からは、wi が全道的に分布し、i が慶南・慶北に分布することが分かる。韓国精神文化研究院(1987-1995) からは、韓国地域に限るが、y が全南・全北・忠南・忠北・京畿・江原に主に分布し wi が各地に点在すること、i が慶南・慶北に分布することが分かる。後期中世語で上声であった単語では、それが母音連続ではなくて長母音として反映されることも確認できる。金英培(1977) からは wi または u が平南・平北に分布することが分かる。

2.3.2.1 各方言資料の共通点と相違点

/ㄱ/ 音に関する各資料の主な共通点は、済州では wi や we が、慶南・慶北では i が、平南・平北では wi が主に分布し、単母音 y が確認されないことである。また「糊刷毛」「귀알」を除いて基本的に同じ語形が使われている。これらは各資料の間での不変化、即ち語形や発音の維持を示唆する。

/ㄱ/ 音に関する各資料の顕著な違いは単母音 y である。この違いには次の2つの解釈が可能であると考ええる。一つは小倉進平(1944) では y と wi を併せて wi (ui) と記した可能性である。このように考えると、小倉進平(1944) 調査時にも全南・全北・忠南・忠北・京畿・江原では y の発音が優勢であったと考えられる。また一つは小倉進平(1944) 調査時には確かに wi だったが、韓国精神文化研究院(1987-1995) 調査時には y に変化した可能性である。このように考えると、20世紀前半から後半に wi > y のような音変化が起きた地域があることを示唆し、こうした変化を論ずる先行研究の見解を支持する。

今、音変化の問題と関連して、韓国精神文化研究院(1987-1995) では全南・全北・忠南・忠北・京畿・江原で基本的に y が分布し、散発的に wi が現れることの解釈が問題となる。即ち斯くの地域ではもともと y だったが、y > wi のような変化が一部地域で起きたとも、もともと wi だったが、wi > y のような変化が斯くの地域で一斉に起きたとも解釈できる。或いはこうした過程を経ずに wi や y になる可能性もある。ここでは、y が分布する中に wi が点在することの解釈が問題になるということを指摘するに留める。

その他の各資料の違いは長母音である。小倉進平(1944) では長母音の語形が見られないが、これは観察の精密さの違いに由来すると思われる¹⁹。各調査項目について見ると、(5) では忠南・忠北で kuj のような語形が見られるが(1) には見られない。これは kwi から kuj に変化したと見るより、(5) は一音節語「귀」を対象にするが、(1) は二音節以上の単語の第一音節を対象にするという違いによるものと見るべきであろう。

¹⁹ 小倉進平(1944) 所載資料に長母音表記が全くないということではない。長母音を含む語形が記録された調査項目も存在するが、(1) ～ (4) ではそのような語形が見られないということである。

また(2)と(6)を比べると、全南・全北・慶南・慶北では使用する語形の系統が変化しているようである。

2.3.2.2 小倉進平(1944)の /ɰ/ 音の分布との比較

(5)～(11)で示した韓国精神文化研究院(1987-1995)の /ɰ/ 音の分布と拙稿(2017)で示した小倉進平(1944)の /ɰ/ 音の分布には共通点が見られて興味深い。

(5)～(11)での y の分布地域(全南・全北・忠南・忠北・京畿・江原)が、小倉進平(1944)での ø の分布地域(韓国地域に限る)と重なる。その他の地域では、済州で単母音 y / ø が現れず二重母音 wi / we が現れ易い。慶南・慶北でも単母音 y / ø が現れ難く、その代わりに wi / we 等の二重母音や i / e 等の単母音が現れ易い。なお平南・平北については、金英培(1977)では /ɰ/ が wi または u で現れるのに対し、小倉進平(1944)では /ɰ/ が we で現れ易いという特徴を見せる。

(5)では忠南・忠北で kuj が、(9)では忠南に nuj が見られる。これは小倉進平(1944)の山・墓(小倉進平1944上: 35-36)で忠南・忠北に mo-i が、黄瓜(小倉進平1944上: 203-204)で忠南・忠北等に o-i が見られる点に通ずる。以上の語形は忠南・忠北での発音の地域的特徴を示唆する。但し mo-i や o-i は後期中世語の上声に由来すると考えられるが、ɰ は後期中世語では去声である。(10)は後期中世語では上声であるが、tuj ではなく長母音の語形が見られる。このような違いも注目される²⁰。

2.3.2.3 崔鶴根(1990)の記述

崔鶴根(1990: 13)では、単母音 y は wi と i の中間に位置し、主に南部方言群でのみ発音されるという。上記(1)～(11)に該当する項目を参照して y が現れる地域を調べると、(1)で ky 等が全南・全北・慶南・慶北・忠南・江原に、(10)で ty が全南に見られるのみである。その他の項目については、単母音 y を含む語形は記録されず、その代わりに wi 等の発音が記録される。ここで(1)では y が確認されるが、(5)に当たる項目では y が確認されない。この場合、(1)で y と記録された地域は(5)で i や wi として記録される。

以上の如き崔鶴根(1990)の記述から推察すると、単母音 y の発音が安定していなかったために wi や i と聴取された可能性がある。或いは小倉進平(1944)、韓国精神文化研究院(1987-1995)、崔鶴根(1990)所載資料の記述を文字通りに解釈すると、全南・全北・忠南・忠北・京畿・江原のある地域では、小倉進平(1944)調査時に wi、崔鶴根(1990)調査時に wi 乃至 y、韓国精神文化研究院(1987-1995)調査時に y といった具合に wi > y のように変化したと解釈する余地はあるかもしれない。

2.3.3 ɰ > ɰ

2.3.3.1 第一音節

/ɰ/ の変種として第一音節に wi が現れたと考えられる語形を含む項目は「外」「肉魚」「黄瓜」「鉄・金」「猫」「牛」「誦んずる」「回答」等であり、そのような語形は慶南・慶北で特に

²⁰ 郭忠求(1982: 30-42)は後期中世語での上声がどのように反映されているか等を根拠にして、/ɰ/ と /ɰ/ が単母音化する時期の違いを論ずる。

現れる²¹。「肉魚」「牛」は前舌母音化を経てから /ㄴ/ の変種として現れたものであろう²²。

これらの項目の慶南・慶北の語形を韓国精神文化研究院（1987-1995）、金英培（1977）、崔鶴根（1990）所載資料で調べると、「鉄・金」に関して崔鶴根（1990: 1072-1075）で慶北に fyi という語形が見られるのみで、この他に単母音 y は確認されない。(5)～(11)において慶南・慶北で y が現れ難い点に通ずる。

2.3.3.2 第二音節以降

/ㄴ/ の変種として第二音節以降に wi が現れたと考えられる語形を含む項目は「痣」「髭」「岩」「瘦せる」である。後期中世語では綴字が ㅍ であったことに由来する。

(12) 痣（小倉進平1944上: 110-111）

主要な語形は sa-ma-gwi と sa-ma-gu である。gu が全南・全北・慶南・慶北・忠南・忠北・江原・黄海・咸南・咸北・平南・平北（A地域）に、gwi が忠南・京畿・黄海・咸南・咸北（B地域）に第三音節で現れる。言語地図から ABA のように分布することが分かる²³。その他、gi が咸南・咸北に、k^hwi / k^hi が咸北に第三音節で現れる。

(13) 髭（小倉進平1944上: 144-145）

tal-wi が済州に、ta-ru が全北・忠南・平北に、ta-ri が全南・全北・慶北・忠南・忠北・京畿・江原・平北に²⁴、ta-rɛ / tal-lɛ が京畿・黄海・平南・平北に見られる。第二音節頭が b の tal-bi が済州・京畿・平南以外の全域に、ta-bɛŋ-i が慶南に見られる。

(14) 岩（小倉進平1944上: 220-221）

現在の韓国語標準語形の pa-wi は忠南・京畿・江原・黄海に見られる。その他、u が全南・全北・慶南・慶北・忠南・忠北・江原・黄海で、gu が全南・慶南・慶北・忠北・江原・黄海で第二音節に現れる。第二音節頭が k^h の paŋ-k^hwi / paŋ-k^hu が黄海に見られる。済州・咸南・咸北・平南・平北は別系統の語形を使うか、または未調査地点である。

(15) 瘦せる（小倉進平1944上: 373-375）

jɔ-wi-da 系統の語形について概観すると、wi が京畿・江原・黄海に、u が全南・全北に、ii が全北・忠南に、bu が全南に、bi が慶南・慶北・江原・咸南・咸北に第二音節で現れる。

(12)～(15)より次のことが分かる。項目及び地域ごとに発音の傾向が異なる。wi が「髭」

²¹ このうち「外」「肉魚」「黄瓜」「鐵・金」「誦んずる」「回答」については拙稿（2017）参照。

²² 或いは「牛」については /ㄴ/ の変種の可能性もある。

²³ 柳田國男（1930）以来、こうした分布では A の語形が古く、B の語形が新しいと見做すことがある。「痣」の後期中世語はㅍㅍㅍであるから、文献上の記録にも合致するように見える。しかし次のような課題もある。韓国語でも柳田國男（1930）のような分布が推定できるかの検証が必要である。方言周圏論は音声や文法より語彙により適合すると言われる（樺垣実1953）。ABA 分布の A 地域が古い形を残しているのか、または他地域よりも新しい変化を起こした形を見せているかは検証する必要がある（金田一春彦1953）。また近年、方言周圏論に否定的な論考が見られる（大西拓一郎2017a, 2017b, 2017c）。

²⁴ ta-ri ʔkop-tʃi (sic) と言う語形が見られるが、これは ta-ri ʔkop-ʔtʃi と表記する方が適切であろう。

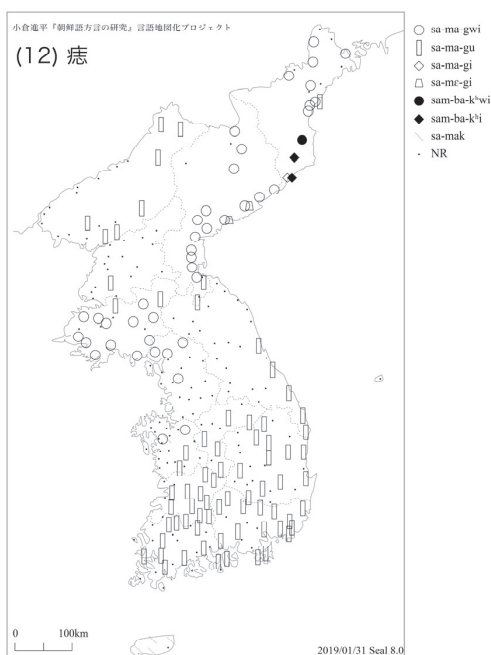


图12. 痣

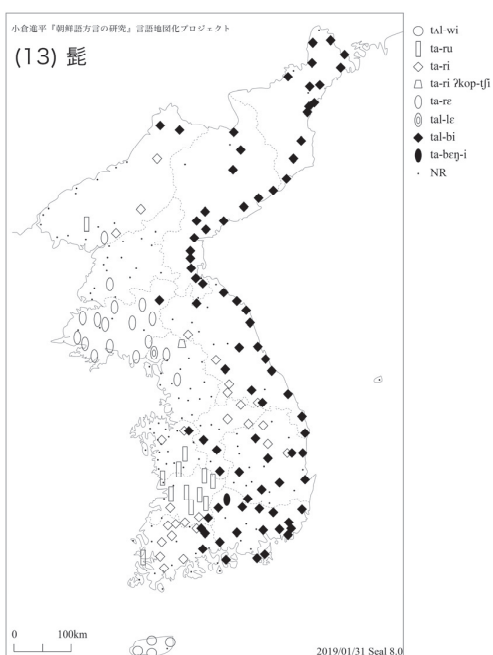


図13. 髭

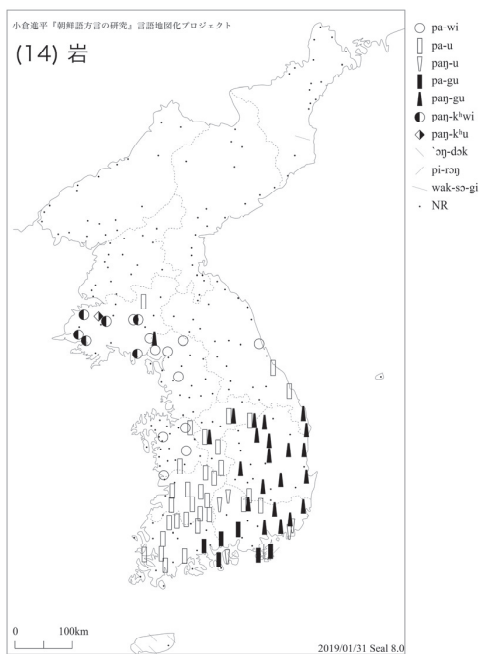


図14. 岩

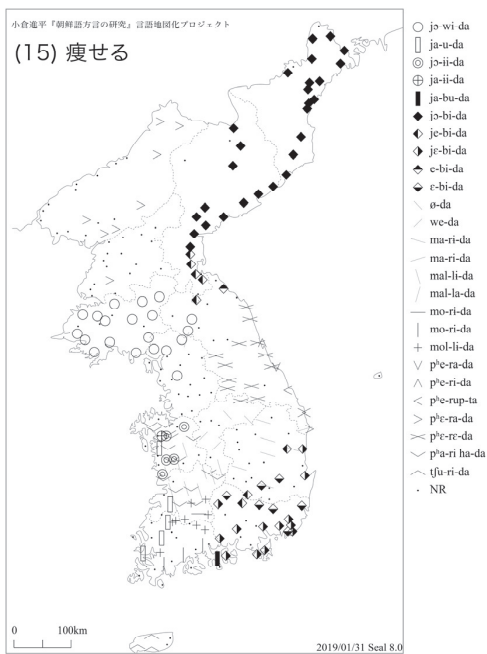


図15. 痩せる

を除き忠南・京畿・黄海に現れ易く、u が全南・全北・忠南に現れ易い。w に代わり b / k / g が入る語形が慶南・慶北・江原・咸南・咸北のような朝鮮半島東部に現れ易い²⁵。

韓国精神文化研究院（1987-1995）所載資料によると、(12) に当たる사마귀【痣】（韓国精神文化研究院1987-1995: I. 252）の第三音節で y が現れるのは忠北・京畿、(14) に当たる바위【岩】（韓国精神文化研究院1987-1995: I. 540）の第二音節で y が現れるのは全南である。崔鶴根（1990）では(14) に当たる바위（崔鶴根1990: 122-124）に pay と言う語形が見られる。これら以外に韓国精神文化研究院（1987-1995）、金英培（1977）、崔鶴根（1990）所載資料で当該項目に y を含む語形は見られない。(5) ～ (11) と比べると単母音 y は現れ難い傾向がある。その理由には、第二音節以下を対象にしていることや、ㅍ > ㅍのような変化が背景にあることが考えられる。

2.3.4 前舌母音化

前舌母音化（ㅍ > ㅍ）によって wi が現れたと考えられる語形を含む項目は「角」「煙出し」「蓑」「馬槽」「嘴」等である。このうち第二音節で前舌母音化したと思われる「角」「嘴」では wi が一部地点に散発的に現れるので、第一音節で前舌母音化したと考えられる「煙出し」「蓑」「馬槽」について考察する。

(16) 煙出し（小倉進平1944上: 119-121）

kul / kum / ku が全道に、kwil / kwi が全南・全北に、ki / ke が慶南に第一音節で現れる²⁶。

(17) 蓑（小倉進平1944上: 174-175）

nu-jok が黄海・平北に、nwi-jok が江原・黄海・咸南に見られる。その他の地域では別系統の語形を用いる。

(18) 馬槽（小倉進平1944上: 226-227）

ku / kuŋ が済州以外の全道（A地域）に、kwi / kwiŋ が慶北・京畿・江原・黄海（B地域）に第一音節で現れる。言語地図から ABA のように分布することが分かる²⁷。その他、ki が江原に、kwe / kweŋ が京畿・黄海に、kwεŋ が黄海・平南に、kwɔŋ が黄海に第一音節で現れる。

以上のうち「蓑」「馬槽」では京畿・黄海・江原周辺で前舌母音化による wi が現れ易い。第二音節で前舌母音化による wi が現れる語形のうち、「角」は黄海・咸南に、「嘴」は京畿・黄海にそうした語形が見られる（2.2参照）。斯くの地域での発音の特徴と言えよう。

以上の項目のうち、韓国精神文化研究院（1987-1995）所載資料の군호【煙突】（韓国精神文

²⁵ 「痣」は第三音節頭にもとから g を持つため、「岩」は朝鮮半島北部が未調査のため、「痩せる」は黄海で異なる系統の語形を用いるため、必ずしも判然とはしない。

²⁶ ku-muk-tuk (sic) と言う語形が見られるが、これは ku-muk-ʔtuk と表記する方が適切であろう。

²⁷ こうした分布については脚注23を参照。また第二音節頭に s を持つ語形が全南・全北・慶南・慶北・江原・咸南・咸北（A地域）に、そうでない語形が忠北・京畿・江原・黄海（B地域）に見られるとみて、言語地図から ABA のように分布する様子も窺える。「馬槽」の単語史に関しては河野六郎（1945, 1979 I: 167-180）を参照。

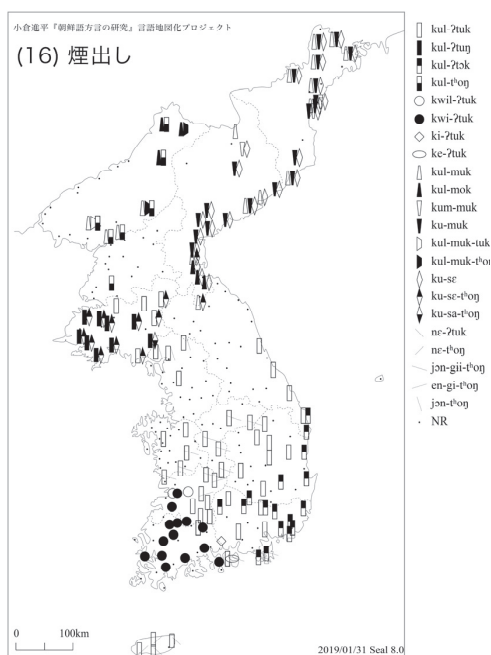


図16. 煙出し

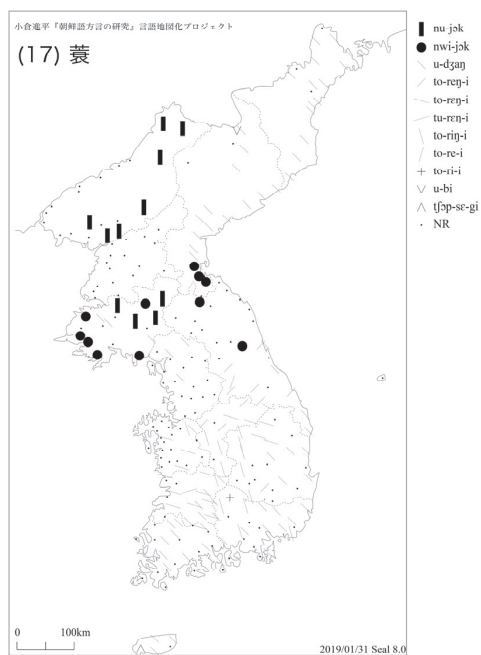


図17. 蓑

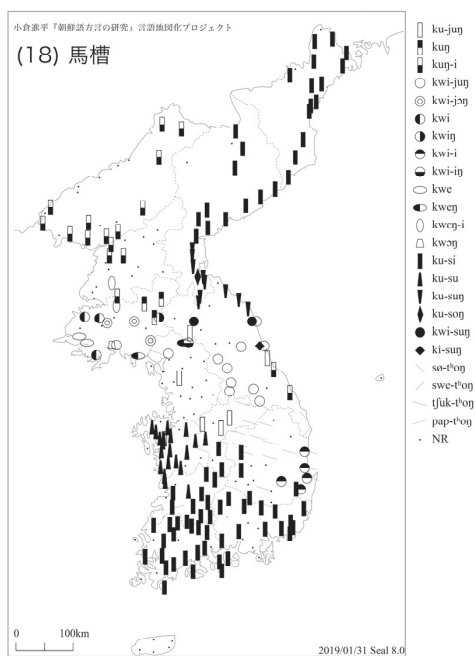


図18. 馬槽

化研究院1987-1995: I. 114) では全南・全北で第一音節に y が, 子音【馬槽】(韓国精神文化研究院1987-1995: I. 458) では京畿・江原で第一音節に y が現れ, この他に韓国精神文化研究院(1987-1995), 金英培(1977), 崔鶴根(1990) 所載資料で y を含む語形は見られない²⁸。韓国精神文化研究院(1987-1995) で y を含む語形が見られるのは小倉進平(1944) の転写の問題か, または発音の変化を示唆するだろう(2.3.2参照)。

2.3.5 その他

2.3.5.1 語中の b や k / g

2.2で挙げた wi か u-i を含む語形のうち, w / u が b 乃至 k / g で現れる項目が幾つか見られる。これは第二音節以下の音節頭に見られる。b を伴う項目は「姉妹」「髭」「鰕」「蚕」「痩せる」等であり, k / g を伴う項目は「山葡萄」「岩」「狐」等である²⁹。

2.3.5.2 接辞 -i または発音の地域的特徴

2.2で挙げた語形には, 接辞 -i もしくは発音の地域的特徴と考えられる wi や u-i が語末に来る項目が幾つか見られる。例えば2.2の「野原」「釘」「饅頭」「炒麵」「焼酎」「棗の実」「杏子の実」「唐辛」「箸」「木」等の語形が該当し, 特に咸南・咸北で顕著である。

2.3.5.3 各々の単語史を考慮すべき項目

2.2で挙げた項目のうち, 「姉妹」「蜀黍」「蚕」は wi / u-i の見える語形が複数あるか, 比較的広範囲に現れる。「姉妹」は単語史と標準語化と関連して, 「蜀黍」「蚕」は母音の音色の変種としてこうした語形が現れる。また「山葡萄」の語形は後期中世語の綴字を反映するものである³⁰。以上の項目は類例が得難い, 乃至個別に単語史を検討すべきと考え, 斯様な項目があることを指摘するに留める。

3 おわりに

本稿では小倉進平(1944) 所載資料に基づく言語地図に, 韓国精神文化研究院(1987-1995), 金英培(1977), 崔鶴根(1990) といった方言資料を適宜参照して現代韓国語 /ㅍ/ 音の地域的特徴を詳らかにした。その道程を記して結語に代える。

まず分析方法と扱う方言資料を述べた(2.1)。次に小倉進平(1944) 所載資料のうち /ㅍ/ 音の地理的分布を描くのに相応しい語彙項目を選定した(2.2)。そして小倉進平(1944) 及び韓国精神文化研究院(1987-1995), 金英培(1977) 所載資料のうち後期中世語から現代語まで綴字がㅍのままであるような項目を通して, /ㅍ/ 音の地理的分布の特徴を明らかにした

²⁸ この他の項目「蓑」「角」「嘴」は該当する語形が韓国精神文化研究院(1987-1995) にない。また金英培(1977) には「角」「煙出し」「蓑」「馬槽」「嘴」に該当する項目がない。

²⁹ こうした現象については小倉進平(1939, 1944下: 42-91) 及び小倉進平(1941, 1944下: 91-124) を参照。

³⁰ この他, 後期中世語の綴字がㅍであった項目に「箒」(小倉進平1944上: 248) がある。例えば金英培(1977: 148) には平北でㅍという語形が見られるが, 小倉進平(1944) では多くの地方で pi となっていて決して pwi のような語形は現れない。これはㅍ>ㅍのような変化によるものと思われる。先行子音が両唇音であるとき, こうした変化が起き易いことが知られる(兪錫在2006)。

(2.3.1)。その結果を踏まえ、各方言資料の比較から見出される共通点と相違点、/ɾ/ 音と /ɽ/ 音の分布の対称性、/ɾ/ 音の変化過程等を考察した (2.3.2)。その後、ɽ > ɾ のような変化が伴う /ɽ/ 音の変異音に wi が現れる地域を示した (2.3.3)。前舌母音化による /ɾ/ 音の変異音に wi が現れる地域も示した (2.3.4)。語中の b や k / g との関連、接辞 -i または発音の地域的特徴、各々の単語史を考慮すべき項目についても指摘した (2.3.5)。

以上の如き試みは、拙稿 (2017) 同様、方言資料と言語地図の活用例として意義を持つ。拙稿 (2017) とは異なり、本稿では調査時期の異なる方言資料を比べるということを試みることもできた。本稿の議論は必ずしも類例が豊かとはいえない場合があるので、方言資料や言語地図或いはその他の言語資料等に依る韓国語史の考察を続ける必要があることは言うまでもない。

参考文献

- 岩井亮雄 (2017) 韓国語の母音 ø の音色の地域差について—小倉進平著『朝鮮語方言の研究』所載資料を活用して—。『東京大学言語学論集』38: 7-99, e63-e74. 東京大学言語学研究室。
- 榎垣実 (1953) 方言孤立変遷論をめぐって。『言語生活』24: 44-48. 東京：筑摩書房。
- 大西拓一郎 (2017a) 言語変化と方言分布—方言分布形成の理論と経年比較に基づく検証—。大西拓一郎編『空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—』1-20. 東京：朝倉書店。
- 大西拓一郎 (2017b) 蛇の目と波紋—野草や小動物の方言を例に—。大西拓一郎編『空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—』252-259. 東京：朝倉書店。
- 大西拓一郎 (2017c) 言語変化と中心性—経年比較に基づく中心性の検証—。大西拓一郎編『空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—』323-341. 東京：朝倉書店。
- 大西拓一郎編 (2016) 『新日本言語地図—分布図で見渡す方言の世界—』東京：朝倉書店。
- 大西拓一郎編 (2017) 『空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—』東京：朝倉書店。
- 小倉進平 (1931) 朝鮮語母音の記号表記法について。『音声の研究』4: 139-149. 日本音声学会。
- 小倉進平 (1939) 朝鮮語の語の中間に現はれる [b]。『青丘学叢』30: 1-62. 青丘学会。[小倉進平 (1944下: 42-91) 再録]
- 小倉進平 (1941) 朝鮮語の音節の中間にあらはれる [k], [g]。『言語研究』7-8: 1-16. 日本言語学会。[小倉進平 (1944下: 91-124) 再録]
- 小倉進平 (1944) 『朝鮮語方言の研究』上下2巻。東京：岩波書店。
- 金田一春彦 (1953) 辺境地方の言葉は果たして古いか。『言語生活』17: 27-35. 東京：筑摩書房。
- 河野六郎 (1945) 『朝鮮方言学試攷：「鋏」語考』京城帝国大学文学会論纂11. 京城：東都書館京城支店。[河野六郎 (1979 I: 101-373) 再録]
- 河野六郎 (1979) 『河野六郎著作集』全3巻。東京：平凡社。
- 鄭承喆 (2010a) 小倉進平の生涯と学問。『2009年度東京大学コリア・コロキウム講演記録』17-32. 東京大学韓国朝鮮文化研究室。
- 福井玲 (2016) 小倉進平の朝鮮語方言調査について—『朝鮮語方言の研究』所載資料の活用のために—。『東京大学言語学論集』37: 41-70. 東京大学言語学研究室。
- 福井玲編 (2017) 『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』第1集。

- 東京大学韓国朝鮮文化研究室. [韓国語研究会編 (2018: 205-349) 再録]
- 福井玲編 (2018) 『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』第2集. 東京大学韓国朝鮮文化研究室.
- 柳田國男 (1930) 『蝸牛考』東京: 刀江書院.
- 郭忠求 (1982) 牙山地域語의 二重母音 變化와 二重母音化—y 系 二重母音과 ㅑ > wㅑ 變化를 中心으로—. (牙山地域語の二重母音變化と二重母音化—y 系二重母音と ㅑ > wㅑ 變化を中心)—『方言』6: 27-55. 城南: 韓国精神文化研究院. [鄭承喆・鄭仁浩編 (2010: 93-123) 再録]
- 郭忠求 (2003) 현대국어의 모음체계와 그 변화의 방향. (現代国語の母音体系とその変化の方向) 『国語学』41: 59-91. 国語学会.
- 金敏洙・河東鎬・高永根編 (1979) 『歷代韓国文法大系』2-5. ソウル: 塔出版社.
- 金敏洙・河東鎬・高永根編 (1985a) 『歷代韓国文法大系』1-34. ソウル: 塔出版社.
- 金敏洙・河東鎬・高永根編 (1985b) 『歷代韓国文法大系』1-42. ソウル: 塔出版社.
- 金鳳國 (2006) 개화기 이후 국어의 ‘위, 외’ 음가와 그 변화. (開化期以降国語の‘위, 외’音価とその変化) 『李秉根先生退任紀念国語学論叢』155-191. ソウル: 太学社. [鄭承喆・鄭仁浩編 (2010: 329-363) 再録]
- 金英培 (1977) 『平安方言의 音韻体系研究』(平安方言の音韻体系) 韓國学研究叢書第11輯. ソウル: 東国大学校韓國学研究所.
- 宋喆儀・兪弼在 (2000) 서울 방언의 국어학적 연구. (ソウル方言の国語学的研究) 『서울학연구』(ソウル学研究) 15: 5-53. ソウル市立大学ソウル学研究所.
- 兪弼在 (2006) 양순음 뒤 ‘ㄴ’ > ‘ㄹ’, ‘ㄱ’ > ‘ㄴ’ 변화에 대하여. (兩唇音後の‘ㄴ’ > ‘ㄹ’, ‘ㄱ’ > ‘ㄴ’變化について) 『李秉根先生退任紀念国語学論叢』193-209. ソウル: 太学社. [鄭承喆・鄭仁浩編 (2010: 385-400) 再録]
- 李秉根 (2005) 1910~20년대 일본인에 의한 한국어 연구의 과제와 방향—小倉進平의 方言研究을 중심으로—. (1910~20年代の日本人による韓国語研究の課題と方向—小倉進平の方言研究を中心)—『方言学』2: 23-61. 韓国方言学会.
- 李崇寧 (1956, 改訂版1968) 『고등국어문법』(高等国語文法) ソウル: 乙酉文化社. [金敏洙外編 (1985a), 金敏洙外編 (1985b) 再録]
- 李崇寧 (1976) 『革新国語学史』博英文庫101. ソウル: 博英社.
- 이옥희 (2014a) 19세기 후기 서울 지역의 ‘ㄴ’, ‘ㄱ’에 대한 공시적 변이와 사회적 변인 연구 (1). (19世紀後期ソウル地域の‘ㄴ’, ‘ㄱ’についての共時的変異と社会的変因研究 (1)) 『우리말연구』(我がことば研究) 36: 59-89. 우리말学会.
- 이옥희 (2014b) 국어 모음 변화의 사회적 변인 연구. (国語母音變化の社会的変因研究) 『韓國語学』64: 88-116. 韓國語学会.
- 李翊燮・田光鉉・李光鎬・李秉根・崔明玉 (2008) 『韓國言語地図』ソウル: 太学社.
- 李炫馥 (1971a) 현대 서울말의 모음 음가. (現代ソウルことばの母音音価) 『語学研究』7-1: 37-52. ソウル大学校語学研究所.
- 李炫馥 (1971b) 서울말의 母音體系. (ソウルことばの母音体系) 『語学研究』7-2: 11-17. ソウル大学校語学研究所.
- 李熙昇 (1955) 『国語学概説』ソウル: 民衆書館.
- 鄭承喆 (2010b) 小倉進平의 생애와 학문. (小倉進平の生涯と学問) 『方言学』11: 155-184. 韓

国方言学会.

鄭承喆・鄭仁浩編 (2010) 『二重母音』 ソウル：太学社.

鄭仁浩 (2004) 下降 二重母音과 浮動 二重母音의 音變化. (下降二重母音と浮動二重母音の音變化) 『語文研究』 32-2: 119-143. 韓国語文教育研究会. [鄭承喆・鄭仁浩編 (2010: 305-327) 再録]

崔明玉 (1982) 『月城地域語의 音韻論』 (月城地域語の音韻論) 慶北：嶺南大学校出版部.

최성규 (2013) 남북한 방언에 나타난 ‘ㄱ, ㆁ’의 변화. (南北韓方言に現れた ‘ㄱ, ㆁ’의 변화). 『方言学』 18: 171-194. 韓国方言学会.

崔鶴根 (1990) 『増補 韓国方言辞典』 ソウル：明文堂.

韓国精神文化研究院 (1987-1995) 『韓国方言資料集』 全9巻. 城南：韓国精神文化研究院.

韓国語研究会編 (2018) 『韓国語研究』 13. ソウル：亦樂.

韓榮均 (1991) ‘ㄱ, ㆁ’의 단모음화와 방언분화—강원도 방언의 경우—. (‘ㄱ, ㆁ’의 單母音化と方言分化—江原道方言の場合—) 『國語史와 借字表記』 (國語史と借字表記) 817-846. ソウル：太学社.

許雄 (1985) 『국어 음운학』 (國語音韻学) ソウル：샘文化社.

Han, Mieko Shimizu (1963) *Acoustic phonetics of Korean*. Technical report No. 1. Los Angeles : University of California.

Ramstedt, Gustaf John (1939) Remarks on the Korean language. *Mémoires de la Société Finno-ougrienne* LVIII: 441-453. Helsinki : Suomalais-Ugrilainen Seura. [金敏洙外編 (1979) 再録]

Scott, James (1891) *English-Corean dictionary: being a vocabulary of Corean colloquial words in common use*. Corea : Church of England Mission Press.

**The vowel /ㅍ/ in Contemporary Korean viewed from linguistic maps:
 With a special focus on the *Chōsengo hōgenno kenkyū*
 (Studies in the Korean dialects) by Ogura Shinpei**

IWAI Ryota

This study presents the dialect characteristics of the vowel /wi(ㅍ)/ in Contemporary Korean through the 1944 dialect surveys *Chōsengo hōgenno kenkyū* (Studies in the Korean dialects) of Ogura Shinpei and with reference to the dialect surveys *Hanguk bangeon jaryojip* (Korean dialect materials) compiled by Hanguk Jeongsin Munhwa Yeonguwon (The Academy of Korean Studies) in 1987–1995 and so on. The author selects a group of words in order to analyze the dialect characteristics of the vowel /wi/ through his dialect surveys and clarifies those dialect characteristics through words whose spelling is ㅍ from Late Middle Korean to Contemporary Korean. Based on these results, this paper discusses the similarities and differences obtained from each material, the process by which the sound /wi/ changes, and similarities and differences seen from the distribution of /oe(ㅍ)/ and /wi/. This paper also discusses the dialect characteristics of the sound /oe/ caused by the change oe > wi and the sound /u/ by umlaut, the relevancy between -b/k/g- and /wi/, the suffix -i and dialect habit of the pronunciation, and the history of words that we should consider.